

職場校内の林内で見つけたツルタケです。ツルタケはテングタケ科テングタケ属に属するキノコで、学名は *Amanita vaginata*、漢字では「鶴茸」と書きます。細く白い柄が鶴の脚を思わせることが和名の由来とされ、すらりとした姿が特徴です。テングタケ科には猛毒種が数多く含まれますが、本種は成熟しても「つぼ」を持たず、柄の根元には袋状の「つぼ」が残ります。また、傘の縁には放射状の条線がはっきり現れます。この写真でも、白いひだが柄から離れて付く様子や、根元に残る袋状のつぼが確認でき、ツルタケの特徴をよく表しています。

ツルタケは夏から秋にかけて、アカマツやヒマラヤスギ、コナラ・シラカシなどブナ科樹木のある林内の地面に発生します。枯れ木を分解するキノコではなく、樹木の根と共生する「外生菌根菌」で、樹木から光合成産物を受け取る代わりに、水分や無機養分を供給しています。都市部の公園や植物園などでも、共生相手となる樹木が育っていれば発生することがあり、このようなキノコとの出会いは、地中で営まれている豊かな生態系の存在を教えてください。

よく似たカバイロツルタケは傘が黄褐色から橙褐色を帯びるのに対し、ツルタケは灰色から灰褐色であることが大きな違いです。また、ツエタケは柄に灰褐色の繊維状模様が目立ち、根元のつぼも袋状になりにくいいため区別できます。ただし、幼菌の段階ではテングタケ属の猛毒種と外見がよく似ており、安易な採取や食用は大変危険です。地味ながら気品のある姿を眺めながら、地上に現れている子実体は、樹木と菌類が長い年月をかけて築いてきた共生関係の、ほんの一瞬の姿であることに思いを巡らせたいと思います。

(2026 年 7 月上旬／文京区お茶の水女子大学構内)

